

監房に入ると、それは罪人なるが故に、減食をさせられた。

朝は麦粥で水の様なのが、丼に一杯、昼と晩は、押しずしの様に、四角な箱で押した真っ黒な麦飯が二百グラム、それも何の副食物もなく、あまつさえ、塩けもなく、只、飯だけを食うのであった。それに湯もなく、小さな湯呑に水が一杯であった。監房の附添は下田と云って、先日、この監房から、出たばかりであった、彼は二三年前から、少年舎の父として、多くの子供達から、お父さんと呼ばれていたが、下田は、少年舎にあって、あらゆる悪事がバレて、三回目の監房から出たのであるが、彼の身柄を舎の方で受け取り手がなく、下田は行く所がなく、監房で人のいやがる附添をしていたのである。下田は近い中に逃走して社会へ行くのだと、言っていた。

私が入れられてから。五日目に八人組の逃走者は監房から出された。ある朝、下田が食事をはこんで来た時、「今日から報國農園（ほうこく）の芋堀りだ、それにしても君達は長いな。」と言った。

それから三日目の夕食から、甘藷（かんしょ）の代用主食が出た。月も変わり十一月三日の明治節の日が来た。「もしかしたら今日は出して貰えるかも知れんぞ」と私に仙太はうれしい事を言った。

下田が朝、水をもって来た時、私は彼に、

「なあ下田君、俺達は今日出して貰えるだろうか」

「そうだな、今日はあぶない物だ。」

「どうしてだ」

「何しろ君達は、船を、カッパラって、いたからな」。

仙太は湯呑についてある水を飲みながら、

「心配するな、長尾、今日は間違いなく出してくれるよ。大船に乗った気でいな」

十時頃になってから、分館の職員の靴音がして、鉄の扉がにわかにかいて、こっちは入ってくる様子、

私が仙太に「おい来たぞ出してくれるかな」仙太と私は息を殺して寝たふりをしてしていると、隣りの監房の扉が歩いて、誰れかが入るらしかった。

「おい長尾、新入りらしいな」

「そうだな」

「こんな日に入るなんて、よほど悪い事をしたんだろう。」

職員はやがて扉に、鍵を掛けると、そのまま出ていってしまった。

「仙太、今日は見込みはないぞ」

「それにしても、隣りに入ったのは、一体誰れだろう。」「言葉をかけてみるか」「うん」

「おい隣の客人、お前は誰れだい。」「暫く返事はなかったが、やがて、「塩谷（しおたに）だよ」

「ああ塩谷か、お前、何をやったんだい。」「

「希望の畑の芋を盗んだんだよ。」「

「なんだ野荒しか、あんまり名誉でもないな」

それから三日の後、塩谷はだされたが、私は、仙太と金山は、いつ出されるとも知れなかった。仙太は大きな声を張り上げて、西の隅に入っている金山に、

「おい金山、元気か」

「元気だ、お前はどうか」

「俺も元気だ、出たらまた行こうぜ」

「行こう行こう」仙太と金山は、道を通る人にきこえる様に話していた。

監房の四方は、灰色の壁で、南側の上の方に金網の張った、鉄の棒の差し込んである窓があり、その下の方には、食器を出し入れする横についた小窓があった。そして壁には、園長のタヌキ親父とか、いまに出たらその分にはしておかぬぞとか、すごい文句がかいてあり、園の不規則の矛盾を呪った、皮肉な詩文が書きつらねてあった。